わんりぃ

142号

2009/**4**/1

日中文化交流市民サークル‘わんりぃ’
東京都町田市能ヶ谷町1521-58　田井方
〒195-0053　TEL&FAX:042-734-5100
http://wanli.web.infoseek.co.jp/
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

「紅茶畑で働くタミル人女性たち」(写真説明:16P)
於:スリランカ・ヌワラエリア近郊　2007年8月撮影
日本スリランカ文化交流協会・代表　為我井輝忠

‘わんりぃ’142号の主な目次

北京雑感その(33)「職場の減少」……2
私の調べた四字熟語(31)「滅私奉公」……3
台湾-美麗宝島㊦ 台中の逢甲夜市……4
執念が生んだ精進料理……6
TBSテレビ「報道の魂」を見て……7
媛媛讲故事(12)「孟姜女の伝説 II」……8
四姑娘山・写真便り(17)「女王谷のミカン」……9
中国・東北三省の旅(4)「渤海国興亡記」……10
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より……11
私の四川省 一人旅(23)亜丁X……12
スリランカ紹介(27)「ジャフナ珍道中 II」……14
アフリカとの出会い(31)「耀く子どもたち」……16
‘わんりぃ’掲示板……17・18
中国語で歌おう!会・4月の歌/「阿里山的姑娘」歌詞…18

♪♪「中国語で歌おう!会」4月の歌 ♪♪

ā lǐ shān de gūniang
「阿里山的姑娘」(台湾民謡)

テレサテンも歌った、今でも人気の美しい台湾民謡を歌ってみましょう。(歌詞18p)

於:まちだ中央公民館7F・第一音楽室

JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

4月24日(金)19:00～20:30

指導:趙鳳英(zhào fèng yīng)(中国人歌手)

録音機お持ちの方は、ご持参下さい

●ご予定ください!

「中国で歌おう!会」　5月の講座日は
5月22日(金)19:00～20:30です

＊初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりぃ’事務局(☎042-734-5100)へお問合せ下さい。(体験無料)

職場の減少

有為楠（ういくす） 君代

過日、新聞に、日本の交通カード、スイカやパスモ或いはバスカード等を一緒にしておいて読取り機にかざすと、二重に引き落とされたり、エラーが出たりするケースが多発するので、早急に改善の必要があるという記事が出ていました。JR・私鉄・バス会社がそれぞれにプリペイドカードをスタートさせ、その後スイカ・パスモに集約されましたが、共通で使えるようになるまでに随分時間がかかりました。

この点、北京ではバス・トロリーも地下鉄も一枚のカードで済むので上記のような間違いはありません。

北京市交通部が一括で管理しているので当然ですが、読み取り機の関係で、バスが先にスタートしました。読み取り機は、2006年6月には殆どのバスに設置されていて、ほんの一、二の路線が、車掌さんのハンドリーダーで対応していました。それに対し、地下鉄は、読み取り機の設置が遅れ、正式な設置は、私が北京に行ってからでした。それまでは小さな簡易型の読み取り機を改札口に置いていましたが、これは複雑な読み取り作業が出来ないようで、出口では従来通りフリーパスでした。

そのせいでしょうか、以前は3元、乗り換えると5元だった料金が、一律3元になりました。そして、正式な読み取り機が設置されると、料金は2元になりました。日本では公共料金の値下げなど久しく聞いたことが無かったので、耳を疑いました。

バスもカードを使うと20%の割引になり、便利で経済的なので、私も早速一枚買いました。カードは20元で、これは返却すると返してもらえるものです。そこへ適当にチャージして使用します。因みに、カードは地下鉄の駅で買えます。バス料金の割引は6月頃から始まったそうです。この割引のせいで、交通カードの普及は早かったですね。6月の初めにはカードを使う人が3割程度でしたが、月末には7割以上が使っていました。

元来、北京のバス料金は、一律1元の路線、距離または停留所数によって加算され1.5元から2元になる路線、2元から始まる夏は冷房・冬は暖房の空調バス路線の3種類でしたが、カードの使用によって、0.8元が基本で、距離が長くなると少し高くなる料金は残りましたが、空調バス料金は廃止されました。空調バスは増えましたが、追加料金がなくなりました。これも実質的な値下げですね。

北京市政府の肝いりで始まったこのカードシステムは、北京の人々に交通費の値下げをもたらしました。日本と比べて物価の安い北京ですが、最近は、食料品などがジワジワと値上がりし、人々の生活を脅かしていますから、この値下げは大歓迎されたようです。

システム普及のために、こんなに値下げされて、利用者にはありがたい交通料金のカード化ですが、働く人々にとっては、問題が無いわけではありません。

以前、北京のバスは必ず車掌さんが乗っていて、車内で切符を売っていました。2両連結のバスでは、車掌さんが二人乗っていました。それが均一料金の路線では、路線にもよりますが、連結バスでも乗り口と降り口を指定して、車掌さんを一人にしたり、甚だしいのは、運転手さんだけのワンマン・トロリーバスが走ったりするようになりました。四通八達*のバス路線で、一人ないし二人の車掌さんが失職すれば、失業者は相当な数になります。地下鉄の改札員も然りです。カード読み取り機の設置で、改札の女性がいなくなりました。

この他、私が目にした、働く人の減少は、エレベーター操作員です。

初めてエレベーターのあるマンションに友人を訪ねたとき、エレベーターに乗ったら、箱の中に小さな机があり、その前に座った女性に何階に行くのかと聞かれてビックリしました。暇な時は編み物をしているそうで、編みかけのセーターを手にしながらボタンを押してくれました。当時はまだエレベーターのある建物が少なく、日本と同じ自動エレベーターなのに必ず操作員がついていました。

しかし、この操作員は高層住宅が増えると姿を消し、今では利用者が自分で操作しています。インターホンや自動ドアの普及で、小区や建物の入り口にいる守衛さんの数も随分減りました。また、以前は殆ど街角ごとに、路上に店を広げていた自転車の修理やさんもあまり見かけなくなりました。皆、機械化で不要になった職業です。

そんな訳で、今、北京の就職戦線は過酷です。不景気でビル建設が中断し、地方からの農民工の仕事が減って話題になっていますが、それとは別に、北京市民でも、仕事を探すのは大変です。3,4年前になりますが、新聞に、北京大学修士課程を終了した人が餃子屋さんで働いているという話題が載っていました。勿論これは特殊な例でしょうが、ニュースの趣旨は、高学歴の人でも仕事を探すのが難しくなっていると言うものでした。

発展が著しい中国ですが、発展により発生する問題も少なくないようです。人口が多いだけに、小さな現象も大きなうねりになる危険性を孕んでいて、中国政府の舵取りを一層難しくしています。「胡錦濤主席のお手並み拝見」と言うところですね。

＊四通八達：道が四方八方に広がっている

私が調べた四字熟語 31

滅私奉公（めっしほうこう）

三澤　統

少子化問題や労働人口の減少など、日本がこの先抱える重要問題への解決策として、「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス：WLB）憲章」と「仕事と生活の調和推進のための行動指針」が'07年に決定されました。しかし現場での実態は、策定時の思惑通りには進んでいないようです。

そのことに関連して、朝日新聞の“私の視点”というコラムに、ワーク・ライフ・バランス コンサルタントからの投稿がありました。曰く、「WLBがなかなか認知・実践されない一番の理由は、職場において長時間労働が常態化していることだが、その根底には労働や滅私奉公を美徳とする日本人の価値観もあるのではないだろうか。」

ここで“滅私奉公”が登場します。文字からの意味は、「自分を殺して、公に奉仕する」となりますが、念のため早速辞書を引いて見ますと、三省堂 現代国語辞典では、

「滅私奉公： 自分の利益を考えず、公共のために力をつくすこと。」

とあり、小学館 中日辞典では

「“克己”の項の用例として“克己奉公（kè jǐ fèng gōng”：滅私奉公。」

と載っています。日本語では「滅私」と「克己」の意味合いには違いがありますから、辞書の言うように、中国語の「克己奉公」と私たちが使う「滅私奉公」が果たして同じものかどうか気になるところですが、今回は中国語「克己奉公」という成語の出自「後漢書[注1)]・祭遵伝」に掲載されている話を「滅私奉公」の参考として披露します。

祭遵（さいじゅん）[注2)]は、小さい時から勉勉で良く学び、書に通じ道理をよくわきまえていました。出身は豪族の家柄だったのですが、生活は大変質素でした。後に彼は劉秀（りゅうしゅう）（後の光武帝）のところへ身を寄せ、軍の執法官になって軍管法令の法律について責任を負いました。在職期間中は、厳正に法を執行し、私情にとらわれて法に反する判断を下すような事は一切なかったので、皆から大変敬服されました。

ある時、劉秀が大層寵愛し信用している一人の侍従が罪を犯してしまいました。祭遵は真相を調べて事実を明らかにした後、法に照らしてその侍従を死刑にしました。これを聞いた劉秀は非常に怒り、祭遵を捕らえて処罰しようとしました。けれども側近の大臣がすぐに劉秀を誡めて言いました。

「あなた様は以前、軍にあっては軍紀を厳正かつ公正に執行するよう要求されました。今回祭遵が法に照らして行なった事は間違っていないと思います。にもかかわらずどうして祭遵を処罰なさろうとしているのですか。彼のこのような法に対する厳正な姿勢によってこそ三軍に号令し、軍隊を統率することが出来るのではないでしょうか」

劉秀はこれを聞いてそれも道理だと思い、祭遵の処罰を許しただけでなく、彼を捕虜の将軍を徴用する役である潁陽侯に封じたのです。祭遵の人となりは謙虚で、官吏として清廉で公正であり、事を処理するのも大変慎重に行ないました。そして劉秀からの恩賞は全て部下の者たちに分け与え、自分は一文さえも受け取りませんでした。生活は大変つましく、家には僅かな財産も有りませんでした。そしていずれは執り行うことになる自分自身の葬儀の手配を部下に頼んだ折にさえも、慎ましく無駄を省き、節約を旨とするようにと念を押したのでした。

劉秀は、祭遵が亡くなって何年も経った後もなお、彼の克己奉公の精神を大変懐かしく感慨をもって思い出すのでした。

〈注記〉

1) **後漢書（ごかんじょ）** 中国後漢朝について書かれた歴史書。二十四史の一つ。本紀十巻、列伝八十巻、志三十巻の全百二十巻からなる紀伝体。成立は5世紀南北朝時代の南朝宋の時代で編者は范曄（はんよう）（398年～446年）。

2) **祭遵** （? ～33年）は後漢の武将。字は弟孫（ていそん）、潁川郡潁陽の人（『後漢書』列伝10・本伝）。後漢・光武帝の功臣であり、「雲台二十八将」の9位に序せられる（『後漢書』列伝12）。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）

台湾 - 美麗宝島㊦ 台中の逢甲夜市

佐々木健之

■「予約ありません」といわれる

　私、妻、張さんの三人は2008年11月23日、北大武山から下山して、高雄（左営）を昼過ぎ発の新幹線に乗った。下車駅の台中へは50分くらいで着いてしまう。終点の台北まで乗車する張さんとお別れの挨拶や、荷物の確認などをして、やれ一段落。予定より早い列車に乗ったのでこれから訪ねる私の朋友、許さんに早く着いたと連絡しなければならない。張さんも心得ており、乗車してから許さんの番号を叩いて、何度か通話を試みたがうまく繋がらなかった。連絡が取れないまま、とうとう台中に着いてしまい、張さんとあっけなくお別れになった。高速で移動する台湾新幹線は携帯電話との相性が悪いようだ。

　事前の取り決めでは、許さんが列車に合わせて台中駅へ迎えに来てくれる手はずだった。しかし二時間も早く着いたので迎えを断り、台中駅からタクシーでホテルへ乗り付けることにした。山登中の三日間で汗まみれで、一刻も早くホテルのシャワーを浴びたかったのも一因である。

　やたらと広いくせに人影まばらな新幹線台中駅舎内を右往左往して公衆電話を見つけ、許さんに出迎えはいらなくなったと伝え、次にタクシー乗り場を探した。

　タクシー乗り場は閑そうだった。案内係が乗客に紙切れを渡すので、何かと見れば白紙のタクシー領収証。これの使い道は乗客が好きな数字を書き込み、サラリーマンは会社に回し、自営業者は経費で落とす仕組みのようだ。

　台湾新幹線の多くの駅にいえるが、ホテルのある台中市街と新幹線の駅はけっこう離れていて、ホテルまで20分ぐらいかかった。

　台中のホテルは、ご当地の許さんに予約をお願いしてあった。台中の市街地にある高層ビルのホテルにタクシーを乗り付けるとさすが五つ星、ドアマンがすかさず飛んできて、荷物を運び入れる。荷物は汚いリックサックなどで、格好は私がサンダル、妻は山から下りたままの泥まみれ登山靴で、共に汗くさく五つ星にはそぐわなかった。

　勇んでフロントにおとなうと、予約は入っていないという。えーっ、うそーっ！　言葉の障害を超えてフロントのお姉さんが伝えたところによれば、それは隣のホテルだろうという。訝しく思いながら荷物を自分で運び、外に出ると五つ星ホテルの脇に通用口といった感じの入り口があり、これが目的のホテルらしい。でも、別棟ではなく同じビルなのだが。

　さて、通用門ふうのガラス戸を開けて中にはいると、なるほど五つ星より見かけが劣るがフロントがあった。係の小姐に問い合わせると、ここでも予約はないという。これは困った、困惑だ。けれども次の策を考える間もなく、小姐は向こう側のホテルだろうと後ろを示した。振り向くと同じホールのはす向かいの隅に、もう一つフロントがあった。また荷物を持ち、左側のフロントから右側のフロントへ移動した。カフカの小説並みに永遠に予約したホテルに着かない予感がしたが、今度のフロント嬢は和服姿の台湾小姐で日本語OK、「予約あります」。やっと今夜のホテルにたどり着いた。

　整理してみると、もともとは「台中晶華酒店」という名前で営業していた大きなホテルが、経営者が変わって五つ星の「台中金典酒店」になった。同じビルにまだ空いている階があるので、別の廉価ホテル２軒が入った？かな。

　道理で事前に聞いた料金が、五つ星なのにバカに安いと思ったが、許さんが私の懐を察して設備の割には格安の宿を見つけてくれたのだ。そんないきさつをメールで書いて送ってくれたが込み入った中国文は判らず、文脈を勝手に解釈して五つ星のホテルと思いこみ、恥ずかしい振る舞いをしてしまった。予約のホテルは「中港新館」といい、台湾・日本人ビジネス客などを客層としているようだ。

■許さんのこと

　許さんとは日本で知り合った。彼は、新橋で台湾料理の店を美人の奥さんとやっていて、私が週一回くらいの割合で昼飯を食べに行った。ある時から塩加減が濃くなったので聞いたところ、お客さん方がもっと味濃くした方が日本人の口に合うといわれ、不本意ながら濃くしたという。私が注文するときは前のままの味がよいと言ったのが気に入られたのか、なにかとサービスしてもらった。日本のラーメンは味が濃くて台湾人には食べられないと何かで読んだので、本来台湾料理は薄味らしい。

宿泊した高層ホテル(正面)。かなり目立つので遠出の散歩も安心。公園で市民が太極拳

許さんの車に取り付けた、盗難よけ器具「鋼甲武士」。盗難犯への心理的効果が大きい。

　数年して許さんは台中へ帰ったが、メールの往来は続いて、ぜひ台中へおいでなさいというのでこのたびの訪問となった。

　部屋でシャワーを浴び、約束の午後５時にホテルのロビーで待っていると、 許夫妻が黒いトヨタで迎えに来た。今晩案内してもらうのは、「逢甲夜市」といって台中最大の規模で、若者が多い夜市

若者が行き交う「逢甲夜市」。左上緑の丸い看板「新井茶」のすぐ下には「アライチャ」と片仮名があった。

「冰果室」のメニュー。赤い数字は値段、ココナツミルクや生の果物をふんだんに使う。

だそうだ。夜市とは台湾の都会には付きものの屋台街である。今は秋だが夏の昼間は暑いせいか、暗くなってから営業するのが普通だ。

私と妻は後部席に乗り込み、許夫妻は前席に収まってたそがれとなった街を夜市へと向かった。

■逢甲夜市

「逢甲夜市」の名前のいわれは、近くに「逢甲大学」という私立総合大学があり、その名をとって「逢甲夜市」という。では大学の名前はというと日清戦争時代、広東省の教育者に「丘逢甲」という人物がいて、彼の名を冠して命名したのが「逢甲大学」という。この辺は当然孫引き。

許さんの車で夜市近くまで進めると、空いている路肩に駐車した。そこからそぞろ歩きになる。私はコンビニで缶ビールを仕入れる。そのわけは夜市には酒類が無く、ビールなど飲みたい人は事前に買って持ち歩くのだ。私以外は飲まないので、自分用に「台湾啤酒(ビール)」を２缶買った。

広い道路に面して車のとぎれを待ち、通行人と一緒に強引に渡る。渡ったところから夜市の始まりで、人混みと店の多さに初めての日本人には何がなんだか分からない。許夫妻の説明を聞きながら、屋台の奥に分け入る。屋台といっても建物に付随しているものも多い。どれも、一品30～50元(大雑把に100～200円)程度で食べられる。

最初に食べた店は野菜、肉などのいわば台湾風おでんともいうべき煮物だった。４人でそれぞれ注文すると食材に応じて食べやすいようにカットして出してくれ、食べ歩きに適した紙容器に入れてくれた。

美味しくない店や、値段の高い店は自然と客足が遠のいて長続きしないという。許夫人によれば台中の女性は夜市で食事を安く摂ったり、美味しい惣菜ものが買えるので自分で作らなくなり、料理が下手だという。ご主人の許氏も「うちのは料理が下手だ」と本音か冗談かもらした。

人気の店は、行列ができて活気あふれている。臭豆腐の店が何軒かあり、そのうち並んで待つ店は特に美味しいのだろう。我々はメニューに臭豆腐もあるが、並んでいない店に入った。店の道路側は厨房とお持ち帰り品の売り場で、内部は狭い椅子テーブルで窮屈な食堂。さらに奥がありそこはレンタルビデオ屋さんになっていた。レンタルビデオ屋の客は食堂を通り抜けて出入りする。場所の有効利用ができるなら、業種の取り合わせなどかまわないの

腸詰めの中に腸詰め「大腸包小腸包」。これは食べなかった。

だ。スープや麺などを頼み、別に臭豆腐を試食。大多数の日本人には臭くて食べられないというが、普段から臭い納豆など食べているせいか、美味しく味わう。ただし許さんによると臭くない方の臭豆腐だといった。

外に出ると狭い路地は行き交う若者の話し声や、呼び込みのかけ声で活気に満ちている。看板の漢字メニューは素人には難しい。例えば「大腸包小腸包」というものがあり、これはもち米のソーセージのなかにもう一つ小さい肉のソーセージを入れるという入れ子構造のソーセージだ。それと、魚の名前が漢字をみても分からなかった。

今度はデザート、「冰果室」という看板へ。日本流でいえばみつ豆屋といった店の前で漢字メニューの勉強。日本語塾の教師をしている許夫人から、メニューを示して果物や甘みを混ぜ合わしたデザートの説明をしてもらった。日本語教師とはいえ、台湾の果物の名前を日本人の知っている名前でいうのは難しそうだった。テーブルについてそれぞれお好みのフーツデザートを味わった。

おなかが一杯になって、台中の夜市の片鱗を舌と視覚で味わった。台中は台北、高雄に次いで台湾第３位の都市で、台北より好天の日が多く高雄より暑くなく、物価も安い暮らしやすい街だという。

台中滞在は１泊であったが許さんご一家からあたたかいもてなしを受けた。90歳を超す許さんのお父さんは日本語世代で、格調高い日本語を話された。おいとまぎわにふとお父さんの机に目をやると、使い込まれた「英和辞典」が置かれていたのが印象的であった。 （おわり）

執念が生んだ精進料理

岩田温子

２月の初めに友人たちと中国を旅しました。中国のお正月風景を見たり、遺跡や古建築物を訪ねたりするのが目的でしたが、私にはもう一つ楽しみがありました。それは中国の「精進料理」を食べることでした。最近、日本のお寺で何度か精進料理をいただくうちに、本家・中国の精進料理はいったいどうなっているのだろうと興味を持ち始めたわけです。

旅の出発点北京の精進料理レストラン「功徳林素菜飯庄」という、中国仏教界の高僧たちもよく訪れると聞く老舗で料理をいただきました。精進料理については、肉や魚はもちろん生姜やニンニク、葱などの香りの強いものも使わないというぐらいの知識しかなく、中国ではどんな素材をどのように工夫した料理が出てくるのか、とても楽しみでした。

功徳林の入り口

本物そっくりが並んだもどき料理の菜単

見た目は完全に海老料理

店の入り口は有名なお店にしては飾り気のないこじんまりしたものです。ドアを開けると正面に小さな仏像があり、お線香があげられていました。中もあっさりとした内装の部屋で何人もの客が食事をしていましたが、中国のレストランでよく見られる大勢の人たちの熱気あふれる豪快な食べ方や賑やかな物音はなく、静かな雰囲気の中で食事をしている様子は「食事も修行の一つ」という感じを受けました。

いただいた料理は前菜の「蓮根ともち栗の甘煮」と「燻製豆腐と野菜のサラダ」に続き、「牛肉の甘辛煮」、「うなぎのかば焼き」、「海老の炒め物」、「ナマコと帆立貝の炒め物」、「肉団子の煮込み」、「豆腐ときのこのスープ」、「アワビの餡かけご飯」でした。精進料理にはありえない肉料理や海鮮料理のメニューです。運ばれてきた料理は、どれも一見すると本物と見分けのつかない「そっくり料理」でした。海老はクルッと身を曲げ、赤い筋の入った殻をまとい、目玉もついています。ナマコは透明感を保ちながら、黒色で体の上部のぶつぶつのある部分を、茶色で体の下の部分を表しています。帆立貝はその乳白色の色と縦の繊維を感じさせ質感があります。ウナギのかば焼きの皮は黒く、アワビもよくスープで煮込まれた美味しそうな色と形です。そしてこれらを口にした時にさらに驚いたのは、ウナギは口に入れるとサクッとしながら柔らかい身の歯触りがいかにもウナギらしく、海老、ナマコ、帆立貝はそれぞれの微妙な硬さやぷりぷり感がよく再現され、肉団子は挽肉の小さな塊の存在が感じられ、本物を食べているのと変わらない食感だったことです。どの料理もとても美味しくいただけました。

しかし、その味と匂いまで本物そっくりとは言えませんでした。植物性の材料だけで味や匂いの再現まで期待するのは無理難題というものでしょう。海老、ナマコなどはおそらく小麦でんぷんを練りに練って硬くし、それぞれの形を作るのかもしれません。牛肉の甘辛煮は多分湯葉で、 肉団子は大豆たんぱくで、などと食べながら材料を想像するもの面白いものです。アワビに関しては、それより前に出された数々の料理の量が多く、視線はアワビに釘付けになりながらも、おなかが一杯で、残念ながら食べられませんでした。それでも、食べるものすべてが初めての体験で賑やかな歓声が絶えない楽しい食事になりました。メニューには「魚の丸揚げ」や「豚ロース塊の煮込み」,「蟹味噌炒め」などの料理もあります。いったいどういう風なものなのでしょう。また来て、食べて、正体を明らかにしたいという気になりました。

これらの料理のレシピが完成するには並大抵ではない努力と熱意が必要だったでしょう。もしかするとこ

のような料理を作り上げた原動力になったものは、本物の肉や魚を食べられないお坊さんたちの「何としても食べたい！」という執着心だったのでしょうか。そうだとすると、この料理を喜んで食べている間はいつまでたっても煩悩からの解脱が出来ないだろうなとちょっと不届きなことを考えてしまいました。さて、苦悩するお坊さんたちの熱意の恩恵にあずからせていただき、たっぷりと美味しいお料理をいただいた私はその後体重の増加というしっぺ返しを受けました。「精進料理」と聞いてダイエットに良いと錯覚をしてしまいましたが、実は澱粉たっぷりの料理でしたから、思わぬ落とし穴にはまってしまったわけです。これはもしかすると不埒なことを考えたことへの「仏罰」なのかもしれませんね。

アワビもどきが乗ったご飯

これらの料理をせっせといただきながらも、一方で日本の精進料理のようなシンプルな（という表現が適切かはわかりませんが）精進料理は中国にはないものかという疑問が浮かびました。帰国してからパソコンで検索をしてみると、中国の精進料理にはこの「そっくり料理」のほかに、やはり野菜やキノコ、豆腐類を主材料とし、素材を大事にした料理もあるそうです。この系統の料理は温暖な気候を背景にした豊かな魚米の郷といわれる長江以南の地方のお寺で多く供されるそうで、そういう話を知るとまた「修行の旅」に出かけたくなります。

※掲載写真は全て横内襄氏の撮影です

中国を読む（番外）

TBSテレビ番組「報道の魂」を見て

テレビが大好きな同居人と暮らし始めて、つい最近テレビ放送の録画を覚えた。使い始めると便利なものである。おかげで、わんりぃから紹介メールを頂いた番組を観られる。

今回、メーリングリストで紹介されていたのはTBS「報道の魂」(3月16日（月）0：50～1：20放映)。日本で京劇に真摯に取り組まれている張紹成さんの活躍を追ったものだ。

張さんのことを、残念ながら私は存じ上げない。放送された情報がすべてだが、それによれば、客がいなくても給与の支払われる「国が管理する京劇自体のあり方」に疑問を感じ、あえて日本に渡った骨のあるエリート京劇俳優だ。

京劇の舞台化粧の仕方を披露する張紹成氏（右）と殷秋瑞氏
‘わんりぃ’主催:京劇わくわく講座より　撮影:百井謙子

日本での活動は地道だ。衣装係もなく、効果音の録音などやれることはすべて自分でする。飲み会では、仲間が張さんのことを評して「ちょっとお金があると京劇のことに使ってしまう。だからこの人、貧乏なの」というようなことを話していた。国からの突然のスカウトで京劇を始めた少年は、文化大革命で多くが失われた京劇の伝統を繋ぐためにすべてを捧げる志士となった。

京劇に限らず歌舞伎でも能でも伝統芸能を鑑賞するのは難しい。ある一定の「お約束事」を理解していないと、何も分からない。観客にも「勉強」が必要な伝統芸能だからこそ、観客と俳優が一体になったときには、その舞台自体も芸術へ昇華するのかもしれない。

放送のなかで、京劇の立ち回り後、観客から絶妙のタイミングで「好（ハオ）！」と掛け声が上がるシーンがあった。「好（ハオ）！」は京劇の決まり文句ならぬ、決まり掛け声である。舞台を理解する観客のみが発する掛け声。日本の観客のなかにそのような理解者が出てきたことを思わせる、張さんの活動が光るワンシーンだ。

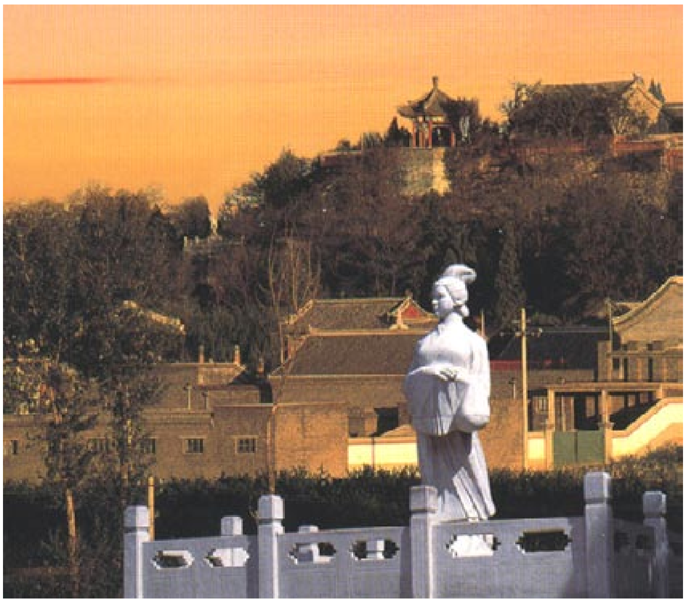
ふとテレビに映っていた観客のなかに、田井さんがいた。わんりぃ主催の舞台だったのだ。　（真中智子）

孟姜女の伝説 Ⅱ

何媛媛

何ヶ月もの旅を続けて、やっと長城建設の工事現場に辿り着いた孟姜女は、人々に夫が何処にいるかを尋ねました。しかし、誰もが首を横に振って分からないと答えました。何十万人の労働者の中から夫一人を探し出すのは到底無理なのです。

それでも諦められない孟姜女は捜し続け、終にある老人から夫はすでに死んでしまっていると告げられ、その骨は万里長城の真下に埋められたという事実を知ると、孟姜女は長城の城壁を力いっぱい叩きながら胸を引き裂かんばかりの声で泣き始めました。



孟姜女が声を立てて泣きに泣き続けている間に、日や月は光を失い、天も地も暗くなり、寒風が吹き起こり、川にも荒い波が立ち始めました。そして突然、ごろごろと天地が裂け砕ける様な大音響が四方に轟き渡ると、万里の長城の数里が崩れ落ち、中から無数の白骨が現れました。孟姜女は泣きながら、それらの白骨の中から夫のものを見分けて拾い出すとお墓を造りたいと思いました。

折も折、万里の長城の工事状況を見回っていた始皇帝は、長城の一部が孟姜女の泣き声で崩れ落ちたことを伝え聞くと非常に怒り、兵士たちを引きつれて孟姜女の所に来､彼女を殺そうとしました。しかし、孟姜女はあまりに美しく、その美貌に心を奪われた始皇帝は、自分の妃にしようと側近の者に説得を命じました。けれども側近の者たちは誰も孟姜女を説得できず、やむなく始皇帝は自ら孟姜女の許に行き、「欲しいものがあるなら、なんでも与える。言ってみよ」と甘い言葉で懸命に説得を試みました。

孟姜女はこの機会を利用して、できるならこの暴君を殺し、夫を殺された恨みを晴らしたいと策を巡らせて言いました。

「三つのことをお願いできるなら承知します。一つ目、お墓を造り、石碑も立て、良い棺で夫を埋葬すること。二つ目、皇帝と官吏たちは、喪服姿で葬式に列席すること」。二つ目の望みを聞いた始皇帝は「皇帝が一般人の葬式に参列は出来ない。三つ目の望みを述べてみよ」と言いました。しかし、孟姜女は「二つ目の望みを叶えて下さらなければ、三つ目の望みを叶えることはできません」と答えました。

どうしてもこの美しい女性を失いたくない始皇帝は、「よかろう。三つ目はどんな望みなのだ？」と孟姜女に尋ねました。彼女は三つ目の願いとして、「海を三日間見たいのです」と伝え、始皇帝も「それは容易なことだ」と承知しました。

お墓を立て、棺を造り、夫を弔う為のいろいろな準備しました。そして葬式の日、始皇帝は孟姜女の望み通りに官吏達を引きつれ盛大な葬式を行いました。葬式が無事終わると、孟姜女は「次は海に行きましょう」と始皇帝一行を誘い、船に乗って海の沖へと出て行きました。

穏やかな美しい海でした。が、突然、孟姜女は自らの身を海に投じ、あっという間に波間に呑まれて行きました。と同時に海は大波が逆巻き大荒れになり、始皇帝は孟姜女を救うこともできず我が身大事と命からがら慌てふためいて逃げ帰りました。

始皇帝を殺すことこそ実現できませんでしたが、大胆に権力に反抗し、夫に対する愛情を貫いた孟姜女の精神はその後の人々に感動を与え続け、「孟姜女、万里の長城を泣き崩す」という物語となりました。この物語は音楽や芝居などいろいろな形で上演されていますし、中国の有名な観光地・山海関の東の鳳凰山には「孟姜女廟」が造られ、夫を想って海を眺める孟姜女の姿があります。

女王谷のミカン

写真と文／
四姑娘山自然保護区管理局 特別顧問
大川 健三

ミカンと言うと、日本ではお正月に炬燵にあたりながら食べる情景が浮かびます。

ミカンは暖かい地方の果物なので意外な感じがするかも知れませんが、標高2000m位の女王谷でも（一種類だけですが）ミカンの木が所々に見られます。ただ日本で主流の温州蜜柑とは異なり、女王谷のミカンは野生っぽい姿と味がします。

写真①がそれで、橙色をした張りの少ない（少し痩せた）実がごつごつした厚い皮に包まれています。11月になると熟して美味しくなりますが、少し酸味が有ります。このミカンは保存性に優れていて、11月に収穫して大きな袋に放り込んでおくだけで、2月頃の春節まで傷みません。

皮や実の状態は収穫時と変わらず、むしろ酸味が消えて食べ易くなります。中に種が有るので少し食べ難いですが、慣れると気になりません。

成都で売られている温州蜜柑系の甘いミカンも美味しいのですが、私は農薬を使ってない野生味豊かなこのミカンの方を好んで食べます。

ほとんどのミカンの木は古いお寺で見られますが、一般の民家でも所々で見られます。栽培されている柑橘類の殆どは接ぎ木されていますが、女王谷でも、一般の民家で見られるミカンの木はカラタチに接木されています。

写真②は小金川下流に有る1000年位の歴史（元々はボン教で後年ゲルク派に改宗）を持つお寺の前庭で、数本見える緑色の低木がこのミカンです。このお寺の外回りには高さ4m位になるミカンの古木が何本も有り、11月になると梯子を掛けて実を収穫する姿が見られます。

写真①　張りの少ない（少し痩せた）実がごつごつした厚い皮に包まれています

写真②　数本見える緑色の低木がこのミカンです

このミカンの正体の説明が最後になってしまいましたが、'わんりぃ'会員の方がお寄せ下さった情報によりますと、このミカンは「椪柑（ポンカン/*Citrus reticulata Blanco cv. Ponkan*）」で、インドアッサム地方原産のミカン科（*Rutaceae*）ミカン属（*Citrus*）だそうです。

女王谷の「椪柑」は原種に近いせいか、皮の凸凹が大きく実が痩せているため一般の市場には出回りません。そのため私は農家の人（当地特有の布を重ねた帽子を被り民族衣装を着た婦人）が時々露天売りしている物を買ったり、お寺や親戚から分けて貰って食べています。

女王谷へは成都から入って来たのか、雲南から入って来たのか、或いはラサから入って来たのか、当地における複雑な移民の歴史と殆どお寺に植えられている事に関わって興味深いものが有ります。

●すでに掲載された「写真便り」はこちらにあります……http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essey-title.html
●大川さんのホームページはこちら……………………………http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm
http://kawamoto1940.web.fc2.com/
http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvalley.htm

渤海国(ぼっかいこく)興亡記

嘉陽ひろこ

“渤海国”をご存知だろうか？ 渤海湾は黄河の最終地だが、“国”は遥か1300余年前、大祚栄が築いた中国東北部の一代帝国だ。中国は唐、武則天の時代、唐に激しく抗い対峙し武則天が送った討伐軍をも撃退、数万人の高句麗の棄民と靺鞨(まっかつ)族を率いて、698年に建国する。

最盛期には、南は平壌を除く北朝鮮の地、西は遼東を除く、かつての高句麗の地、現長春市からハルピン市、北は現ロシアのハバロフスクの手前まで、東はウラジオストックから北へと海岸線が延びる。当時の新羅国の3倍はあろうかと思える領域だ。唐人から“海東の盛国”と称され、政治・経済・文化的に発展し約230年間も続いた。日本では奈良時代後期から平安時代にあたる頃だ。

渤海国が滅ぶのは926年、契丹の耶律阿保機(やりつあぼき)によるが、渤海国の史書はすべて焼き尽くされ、中国の史書「旧唐書・新唐書」等に渤海伝として残るものと、朝鮮側では「高麗史」、日本側文献として菅原道真編纂の「類聚国史(るいじゅうこくし)」は、他には無い渤海関係資料を収録していて貴重だという。半島は統一新羅時代であり、日本海を航行して日本との外交関係を約150年の長期にわたり築いた。日本の古文書「続日本記」には渤海からは、国使を合計34回も派遣して来たと記録があるそうだ。

さて、この国の成り立ち、ルーツについても中国と韓国・朝鮮の学者の間で大きく意見がわかれている。韓国・朝鮮の学者は、高句麗と同じく朝鮮族の国家である、と主張し、中国の学者は高句麗の残党が加わって建国したもののツングース系狩猟民族、粟末靺鞨族(ぞくまつまっかつぞく)が主体であり朝鮮族の国家とは言えないと主張している。日本の記録によると渤海からの使者は「渤海の王族は高句麗の後裔」と称したと伝えている。

私と友人Eが旅行した2008年7月、大祚栄(テジョヨン)が最初に都を置いたのではないか、と言われている吉林省敦化市へと長白山からワゴン車で移動した。ドライバー氏が最初に案内してくれた渤海国の遺跡は礎石のみが残る街中にあった。渤海国の研究はまだ進んではいない、説明文にも、今後の研究に期待する・・・ようなニュアンス。ハングル文字と漢字の二つの説明文があるのも朝鮮族が多数暮らす東北部ならではの事と感心したのだが、見渡せば店の看板、標示、すべて二つの文字が記載されているのに気がついた。

六頂山渤海墓群へ行った。“東牟山(とうむさん)”の険しい山と牡丹江の川に遮られた場所に建国・・・と「渤海伝」に記載があるが、六頂山イコール東牟山かとドライバー氏に聞いたがわからないとの事だった。牡丹江を渡った山の麓に人造湖があり湖を左に見ながら、でこぼこの田舎道を進むと「六頂山古墓群」と記した石碑が見える。80もの王族の墳墓が並ぶというが柵がめぐらされ何びとも通さぬ、と錠ががっちりかかっていた。この墓群も盗掘にあい誰の墓か確認するには難しいそうだ。五京十五府六十二州で国内を統治し、三代目の文王時代に上京龍泉府(じょうきょうりゅうせんふ)（現、黒竜江省牡丹江市郊外渤海鎮）に遷都するのだが、最初の建国地である、ここ六頂山の麓に王族を埋葬したという。

渤海国とは関係ないが人造湖を右手に牡丹江まで戻りすぐ左手に、世界でも最大級の規模を誇る尼寺正覚寺へ行った。赤い屋根の豪華な建物はまるで宮殿のようだ。尼寺と聞いたが尼僧の姿は見えず、夏の光に照り返しの強い境内の階段を上れば汗は滂沱と流れ、千手観音のおわします宝殿に入れば汗に濡れたTシャツはひんやりと冷たくなる、広くて大きい建物群だ。観世音菩薩と書いた建物の造りも少し変わっていて、赤い色の派手な円形の屋根が入り口の両側を飾っている。羅漢堂と書かれた建物の中には、まあ・・・おそらく五百体以上の極彩色の羅漢様の数々、迷路のように右に左に果てしなく、徳利を持つ羅漢様、寝そべっている羅漢様、憤怒の顔ににやけ顔等々、様々な姿態の羅漢様たちにEと私は見つめられてしまった。

「吉林省重点文物保護単位“敖東城(ごうとうじょう)”吉林省人民政府」と二つ（中文とハングル文）の石碑に刻んであるところ、四方を山々に囲まれ牡丹江や図們江(ともんこう)等の源流が近くにあり、唐の軍勢も攻めるに難いであろう、この地、古の渤海国誕生の地。しかし、何も無い・・・。石碑の裏の説明文をカメラに収めていたら、朴さんが近所のオジサンと立ち話しをして、畑の中に礎石があるよ、とオジサンを先頭に歩き出した。夏野菜がたわわに実る畑の端、畑より1メートルほど高くなっているところを指さした。

緑の草に覆われ目視はできないが確かに、礎石らしい。その、人のよさそうなオジサンの家から瓦けが出てきたこともあるという。まだ本格的な発掘はしていないらしい。「その昔、朝鮮族がここに国を建てたそうだよ」とオジサンは事もなげに言った。庶民レベルでは、朝鮮族の国家であると認識しているのだ‼ オジサンにお礼を言って私たちはホテルへと向かった。

高句麗滅亡後、わずか30年で建国した大祚栄の韓国ドラマ「テ・ジョヨン」（134話）を見た。かなりの創作であろ

うが、韓国人の“高句麗”や“渤海”への思いがあふれている。隋の煬帝の軍を破り、隋を滅亡に追いやり、唐の太祖の大軍を追い返し、しかし内紛から668年、唐・新羅の連合軍に破れ700年の歴史を閉じた高句麗。高句麗の滅亡から渤海の建国までの波乱に満ちた大祚栄の生涯を、友情・恋愛・親子愛を横軸に高句麗への忠誠心・名将との師弟愛・信念を貫きとおす意思力を縦軸に織り成す大河ドラマとなっている。戦闘シーンもすごい！ CGを駆使しているのか、どこで撮影したのだろう、万馬が入り乱れて倒れるシーン、山から火矢が降り、丸太が怒涛と落ちて歩兵は下敷きになる等々・・・。韓国の歴史劇が費やす莫大な資金も、アッと言う間に回収できるのだろうか、作り手も視聴者も結末がわかっているのに、歯軋りし、涙し、応援し、ほっとするのだ。人気の秘密がわかるような気がした。

翌日、黒龍江省牡丹江市の南郊外にある渤海鎮へ行った。渤海国三代目の文王時代755年頃遷都したかつての上京龍泉府は、東西4.5キロ、南北3.3キロの王都であった。その中央の北端に一辺が1キロ四方の宮殿があったという。今はここに王都があった事を示す石碑が入り口に建っている。城壁の中へ入れば僅かな石畳の小道を除いて、野菜が植えられている。野菜畑を両側に北へと道は続いているが、その向こうに見える城壁以外何も見えない。振り返り城壁の階段を上ると、そこにも建物の跡の礎石が残るのみ・・・。さて、文王は785年、東京龍源府（現、吉林省の琿春（こんしゅん））へ遷都する。五代目成王の時代に再びここを渤海の王都として定め、契丹に滅亡させられるまで王国の中心としての役割を担った。今は昔、“古井”と書かれた井戸がポツンと往時をものがたっている。

千年もの時の流れと、中国東北部というツングース系の幾多の民族興亡の土地柄からか出土品も少なく、「渤海国上京遺址博物館」には金属製の兜、鉄剣、銅製の小さな仏像、香炉、瓦等、そして歴代の王の肖像画が貼ってあった。高王・大祚栄の肖像画はドラマと違い、大男で荒々しく見えた。博物館も小さく、じっくり見ても30分ほどで充分であった。入り口に渤海時代に造られたという石灯籠のレプリカがあった。ドライバー氏が、韓国人がよく行くという寺に案内するという。ワゴン車で10分ほど農道を走り、ポツポツと人家の見えるところ、興隆寺という鄙びた寺院の前で駐車した。この寺にあの本物の石灯籠があるとは、ガイドの朴さんもその事を知らず、私も恥ずかしいことにガイドブックの斜め読みをしていて、興隆寺の中に入ったのに、古い由緒ある寺だろうとしか思わずに、石灯籠とは面会が叶わなかった。寺の一番奥にあったという。

渤海鎮という名前にかつての王国の名残りを感じつつ、私とEは畑の中にもポツンと建っている「渤海国上京龍泉府遺址」の石碑をカメラに収めて、ワゴン車に乗り込んだ。

（完）

松本杏花さんの俳句　「余情残心（yú qíng cán xīn）」より

木漏れ日を踏み桜しべ踏みにけり

rìguāng rú lòushuǐ
日光如漏水

shù xià tà cǎi xīnshén yuè
树下踏踩心神悦

yòu jiàn yīnghuā ruǐ
又践樱花蕊

季语：樱花、春。

赏析：晚春、树木枝叶尚不浓密、阳光照耀下、地上映出碎斑似的阴影。诗人在富士山下的原野独步、不是踏踩飞落的樱花蕊、就是踏踩这斑斑阴影、心境怡然、别有风情。这都是大自然赋予人类的美啊！对于擅长捉捕大自然之美的作者来说、遇到此景是不会无动于衷的。

早起きのまず確かむる双葉かな

zǎoqǐ bèn huātán
早起奔花坛

jíbùkědài xìchá guān
急不可待细察观

zǐyè chū liǎng piàn
子叶出两片

赏析：此句具有浓厚的生活情趣。在花坛里埋上花种后、便企盼种子快快发芽、可能每天都要观察几遍吧！这次早早起床、直奔花坛、一看、竟露出了脱壳的两枚嫩小的叶片。一个新的生命诞生了！作者对大自然的热爱由此可见一斑。

私の四川省一人旅［23］ 亜丁Ｘ・二度目の亜丁

田井　元子

空が昼間の明るさを失いはじめた頃、私とウィンは洛絨牛場にたどり着いた。おかしな観光施設など建てられていないか不安だったが、牛場の景色は当時と全く変わっていなかった。三年前に私達が泊まったテントが、掘っ立て小屋に変わっている外はすべて以前のままだ。

ただ、あれほど思い焦がれてやってきた洛絨牛場(ルオロンニユウチャン)はなんだかひどく寂しい感じがした。前回訪れた時には野を埋めつくすほど咲き乱れていた高山植物の群落は既に季節が終ってしまったらしく、夕暮れ間近の時刻だったためか旅行者の姿も見当たらず、人気の無い湿原は薄暗くガラーンとして緑の牧草が広がっているだけだ。天候に恵まれさえすれば目の前に素晴らしい姿をみせている筈の「央邁勇(ヤンマイヨン)」も厚い灰色の雲に包まれていた。

ウィンはだいぶ疲れているのか口数も少なくグッタリしたように座り込んでいる。私は彼女をそのまま休ませておいて、掘っ立て小屋に宿泊の交渉に向かった。先ほどすれ違った旅行者の女性は頼んでも無駄だと言っていたが、こんな場合は外国人がたどたどしい言葉でお願いする方が断然有利な気がしていたので、私は楽観していたのだ。

宿の方に向かって歩いていると、明らかに村人ではない様子の男が歩いてきた。警察官のような制服を身に着けて、腕には管理局と書かれた赤い腕章をつけている。

「你好‼ 今日牛場に泊まりたいんだけど宿はあるかしら？」

「宿は一週間前に閉まってる。ここに宿は無い」

「でも、私達ここまで来ちゃ ったのよ。もう夕方だしどうすればいいの⁉」

「沖古寺にもどりなさい」

男はアッサリと言った。

冗談じゃないよ。山のような荷物を背負ってここまで半日かけて歩いてきたのに、沖古寺に戻るなんて‼ 強欲そうな女将の顔が目に浮かんだ。いったいこの男は何なのだろう。高圧的な話し方にムッとした私はわざと反攻的な態度で言った。

「今更あそこまで戻るなんて嫌よ‼ じゃぁ野宿するわ！」

「野宿は禁じられている。とにかく沖古寺に戻りなさい」

これ以上この男と話しても時間の無駄のようだった。

その後の会話を適当にやり過ごすと、男が去っていくのを見届けてから、私は再び掘っ立て小屋に向かった。小屋の煙突からトロトロと煙が昇っているのをみると心がなごんだ。あ～、早く荷物を降ろしてストーブの脇に腰掛けてくつろぎたいな。

小屋の扉を叩くと背の低い木こりのような風体の小屋番が出てきて、ニコリともせずに小屋は閉まっていると告げた。私がいくら笑顔をつくり、どれだけ懸命に頼んでみても無駄だった。全く取り付く島も無いとはこのことだ。扉の隙間から覗ける部屋はガラーンと広く、ストーブの炎が赤く揺れているのが見えていた。

ケチ‼ こんなに部屋が余っているのに‼

ウィンのところに戻った私は次の作戦に切り替える事にした。最初からこんな状況も想定内のことだ。宿が駄目でも私には心当たりがあった。そのために皆に笑われながらも大荷物を背負って歩いてきたのだ。湿原の端からそびえる山の斜面には、三年前に少年達が泊まっていた牛番小屋があったのだ。山裾に数軒建てられていた牛番小屋は、時おり村人に使われる以外は殆ど空き家になっているような小屋もあったはずだ。

「大丈夫、あそこに泊まろうよ！」

牛番小屋を指差すとウィンはだいぶ躊躇している様子だったが、私は有無を言わさず小屋に向かって歩き出した。三年前、少年たちにお茶に招かれた時には空き家のようだった小屋の中にはささやかな生活用具が置かれ、チベット服を着た老婆と10歳程度に見える女の子に2歳くらいの男の子。それに赤ちゃんが住んでいた。放牧シーズンの間ずっとここに滞在して生活している様子だ。

「你好‼ 私達宿がないの。今晩ここに泊めてくれませんか？」

老婆は首を横にふっていたが、しつこく頼み続けるとモグモグと不明瞭な発音の中国語で少し離れた場所に建っているむこうの小屋なら一人10元で泊まらせても良いと言った。

良かった～。これで路頭に迷わないで済んだ～。

ホッとしたのもつかの間、むき出しの地面に、ブリキのトタン一枚で作られた離れの小屋の中は以前ここを使用した者が出した物なのか、酷くゴミが散乱していた。

えぇ～‼ これじゃ物置小屋より酷い！こんな場所に泊まらせるのにもお金を取るの～⁉

ゲンナリした気分だった。だが、とりあえず雨風しのげるなら野宿よりましだ。あれこれ迷うほど選択の余地はないし、もうすっかり疲れていた。私はここで良いじゃないかと思ったが、ウィンは一目みるなり、こんなの人間の泊まる場所じゃない‼ と激しく拒否反応を示していた。

「ここが嫌ならどうするの？ 他に場所が無いんだから仕方ないじゃない‼」

それでもウィンは私の言葉には耳を貸さずに、先ほどの道中で出会った女性が、「泊まれる場所がない事もない」と言っていた事を口に出すと、ガンとして他を探すと言い張った。丁度そんな時、山から下りてきたらしい旅行者が

数人、道の向こうからやってきて小屋の前を通りかかった。間髪入れずにウィンが、この先に泊まれる場所はなかったかと大声で呼びかけると

「あるよ。さっきこの林の奥で、村人から泊まらないかと声をかけられたんだ。」

先頭を歩いていた旅行者の男が答えた。ウィンは勝ち誇ったように言った。ほら、やっぱりもっとちゃんとした宿があるのよ。そっちへ行きましょう‼ 私はしぶしぶ再び重いザックを担ぎあげた。そりゃあ、ここよりもう少しましな宿があるなら、その方がいいけど・・・

私は洛絨牛場からさらに奥の湿原に向かう林の道を歩きながら、訝しい気持ちだった。この道は前回あの宝石の湖を訪れるハイキングの時に歩いているが、そんな宿が建てられるような場所があっただろうか？

二人とも疲れのあまりすっかり無口になっていた。黙ったまま林の中をトボトボと歩いていると、道の奥から人影が現れた。お昼頃別れて以来すっかり姿を見失っていたアーロンとシャオチンが道の向こうからやって来たのだ。

「あ〜‼ やっと見つけたよ‼ 君たち、歩くの遅いなぁ。俺達は何時間も前からこっちに来てたんだぜ。それにしてもここは綺麗な土地だな‼ 俺達はこれから稲城に戻るよ」

「ねぇ、この奥に宿はあった！？」

「あぁ、有る有る。さっきまでそこでお茶をご馳走になってたんだ。泊まっていかないかと誘われたよ」

「どんな宿だった？ 汚くない⁉」ウィンが尋ねた。

「いや、いい家だったよ。この道をもう暫く歩いていけばあるさ。」

私達はお互いにアドレスを交換し合って別れを惜しんだ。私はアーロンが亜丁を美しい土地だと語った事に少し救われた気持ちになっていた。この二日間の間に「旅の同志」というような気持ちが芽生えていたアーロンが、亜丁の本当に美しい部分を見ることなく帰ってしまう事が残念でならなかったのだ。

「これからも連絡を取り合って、ずっと友達でいましょう」

シャオチンが言った。

私達は握手を交わすと、それぞれ別の方向に向かって歩き出した。

私とウィンは先ほどのアーロンの言葉に明るい気持ちを取り戻していた。良かった。友達の言葉なら信頼できる。あと少しの辛抱だ〜。

しかし重いザックを背負い、杖に頼って林の中の道を行けども行けども、そんな宿は見当たらなかった。「暫く歩けば・・・」、などという距離は過ぎているような気がし始めていた。いったいどうなっているんだろう。先程の旅行者もアーロン達もハッキリと宿はあると言っていたはずなのに。ずいぶん歩いたところで林が切れ、私達は見覚えのある広場に出ていた。

あ〜‼ ここは、花園の広場だぁ〜‼

三年前のハイキングで、可憐な花園の中にチベット少年と少女がまるで映画の中から抜け出してきたように寄り添って座っていた、あの広場だ。あの時は絨毯のように一面に広場を埋め尽くしていた野草達は見る影もなく、ただ芝生のような草が生えているだけだったが、広場の中に点在している岩には見覚えがあった。

私は狐につままれたような気持ちだった。この広場から奥の湿原まで岩場の道が続いて家を建てられるような場所は無かった筈だ。ウィンはとうとう「もう歩けない」と座り込んでしまった。だが、この時すでに日は傾き始めていた。早くしなければ日が暮れてしまう。暗くなる前に落ち着き場所を見つけなければ、こんな山の中では身動きがとれなくなってしまうのだ。座り込んでいる時間はなかった。

「ウィン‼ 早く行こう‼」

何度叫んでもウィンは私の呼びかけには答えず、見れば耳に携帯式音楽プレイヤーのイヤホンを差し込んで音楽を聴きながら顔を膝にうずめてうずくまっていた。疲労と不安のあまり、自分の置かれている状況から逃れるためウィンは自分の中に閉じこもってしまったのだ。

バカヤロウ‼ 遭難する気かよ！ こんな時に座り込んでいてどうするんだ。

しかし、こんな状態ではウィンを連れて行ったところで足手まといになるだけだ。私は一人で行動する事にした。重いザックはひとまずこの場に降ろし、ウィンを花園の広場に残すと、私は身軽になった身体で走り始めた。早く宿を見つけなきゃ！ 岩をよじ登り、道を駆け上がる。先ほどまでフラフラだった自分の何処にこんな体力が隠されていたのか自分でも驚いていた。

花園から先の道は、それまでの林の中の道とは打って変わって、道に平行して岩壁が聳えている崖下の岩の道だ。そこから先は神聖な場所とされているのか、道端の岩に経文が書き込まれた色とりどりの布をつなぎ合わせたタルチョが、鳥居のように巻きつけてあった。路頭に迷いかけている心細さも手伝い、薄暗くなりかけた山道でパタパタと風にはためいているタルチョを一人で見ていると、なにか空恐ろしいような気がしてくる。異境にきているのだ・・と感じさせた。

タルチョの下をくぐり小走りに道を進んで行くと真っ黒な大きな水牛が数頭、道をふさいでいた。大丈夫、大丈夫。水牛はおとなしいから・・・そう自分に言い聞かせ、緊張しながらそっと水牛の脇をすり抜ける。

崖の縁が大きくくぼんでいる場所に目をつけると、最悪の場合はここで野宿しようと目星をつけた。暫く岩の

上の道を小走りに進んで行くと突然視界が開け、そこで唐突に道が終っていた。とうとう奥の湿原まで来てしまったのだ。

その瞬間、私は思わず息を呑んだ。

いつの間にか雲がきれたのか、目の前には大いなる霊峰「央邁勇（ヤンマイヨン）」が氷河を頂いた岩峰を夕日に照らされて、オレンジ色に輝く姿を現していたのだ。薄く黄色に染まった湿原には澄んだ小川がサワサワと横切り、咲き残っていた高山植物の花の群れが、夕日にてらされてほんのりと輝いている風景はまるで幻を見ているように美しかった。

あまりにも唐突に現れた景色を呆然と眺めているうちに、涙がポロポロとこぼれ落ちてきた。

あれほど想い焦がれ再訪の喜びに胸を弾ませてやって来た亜丁・・・。だが、村人達の対応は散々なものだった。これまで、アーロンやウィンの手前心の中に押し込めてはいたが、私は本当に悲しかったのだ。心の中で大切に温め、何度も思い描いていた美しい亜丁の幻影はここに来るまでに踏みにじられ、すっかり泥に汚れてしまったような気がしていた。

だが、そんな私のちっぽけな感傷など一気に吹飛ばしてしまうほど、やはり亜丁は美しかったのだ。この圧倒的に美しい雄大な自然の姿の前には、人間の営みなどなんて卑小な物なのだろう。人の欲望や喜びや悲しみ、そんなものは最初（はな）から超越しているのだ。

この自然の美しさだけは絶対に私を裏切らない。やっぱり私は亜丁を愛してる。今日の一日の終わりにこの風景が眺められた事を、私は神様に感謝した。　（続く）

新年号（140号）より続く

ぼくが見て感じたスリランカ紹介 27

ジャフナ珍道中 Ⅱ

赤岡健一郎（日本スリランカ武道協会
日本スリランカ文化交流協会）

僕とカルナラトネの当初の計画では、は早朝にコロンボを出発し、国道1号線（キャンディロード）を経由し、途中から国道6号線を北上して、コロンボから約90kmのクルネガラで古い友人のチャミンドラを拾って直ちに出発。 その後国道9号線を北上してコロンボから約210kmのアヌラダプーラを経由して、コロンボから約400kmのジャフナまで12時間かけて3人で運転を交代しながら突っ走ろうというものでした。

日本のように高速道路があれば400kmは3、4時間あれば走破できる距離ですがスリランカではそうはいきません。コロンボ市内を一歩離れると国道とは言っても名ばかりで道路事情は相当に悪くなります。特に夜間から早朝にかけては街灯が少なくて見通しが悪い上に、ヘッドライトの光の中に路上で寝ている野良牛や野良犬、無灯火の対向車が突然に現われて肝を冷やす事が多々あります。

コロンボ市内でも実際に野良牛と衝突した経験を持つ駐在員が多数いるくらいですから、郊外に出れば危険度は増します。野良牛であるにも拘わらず、後になると必ず牛の所有者なる人物があらわれて損害賠償を求めてくるそうです。街中で牛の放し飼いでもしているのだろうかと不思議な気がします。

クルネガラについて簡単に説明しておきましょう。クルネガラは1200年代末から1300年代の半ばまでの約50年間シンハラ王朝の都があった町で、町の中央にはエレファントロックと呼ばれる象の形をした巨大な岩山がそびえ、頂上には王宮があったと言われています。町田に住んでいるスリランカ人のシリーヘラットさんはクルネガラの出身です。

これまでスリランカを紹介させて頂いてきて、今日になって初めて気が付いた事があります。何処かの町を紹

コロンボから約250km北上したバニーにあるLTTE側最初のチェ ックポイント。ここからジャフナの直前まで約150kmがLTTEの支配地になっている。後方の制服姿の人はLTTEの入国検査官。更に後方に止まっているバスはLTTE政府の直営バス。既に国家としての形態が整備しつつあった。我々が、日本スリランカ文化交流協会の名刺を提示すると、ノーチェックで通過させてくれた。

介すると、何年かの間はシンハラ王朝の都があった町と書く事が多い事です。短期間で遷都したり、同じ町が何度も都に返り咲いたりするので、スリランカの学生さん達は歴史の時間に都の変遷史を覚えるのが大変だろうと同情したくなります。

計画の最大の難関は、前号で紹介したLTTE(タミール・イーラム解放の虎/the liberation tigers of Tamil Eelam)の虎の支配地域をいかに早く通過するかでした。LTTE支配地域の南端にあるバブニヤ（バンニ）と北端にあるパライの町にはチェックポイントがあり、チェックポイントのゲートは3段階にわかれていました。LTTEの支配地域への入り口に当たるバンニの場合には最初にスリランカ政府軍のゲート、次に国際赤十字のゲート、3番目にLTTEのゲートがありました。逆にLTTEの支配地域からの出口に当たるパライでは、LTTEのゲート、国際赤十字のゲート、政府軍のゲートの順になります。各ゲート間は1.5kmぐらい離れていたと思います。

ゲートは午前8時に開門され、午後5時に閉門されます。この時間を過ぎるとゲートは閉められて、LTTE支配地域を通過できなかった全ての車両は足止めされるので、何が何でも通過しなくてはなりません。足止めされた車両と乗員に対するペナルティが有るのか無いのか、LTTEに属さない旅行者が宿泊できる施設があるのか等の情報は集まらなかった、と同行の友人達・カルナラトネとチャミンドラは言っていました。友人達は、閉門時間がそんなに厳格に守られるわけが無いから心配するなと言うのですが、ここが一番気になるところです。

さて珍道中の始まりです。僕とカルナラトネは予定通り早朝4時にコロンボを出発して予定よりも早く、1時間30分ほどでクルネガラのチャミンドラ宅に到着しました。順調な滑り出しと思われたのですが、チャミンドラ宅でアクシデント発生です。

家に着くと、チャミンドラが出てきて母が朝食を用意しているから食べてから行こうと言うのです。計画ではアヌラダプーラで休憩がてら朝食を食べる事になっていたのですが、少し早目にクルネガラに着いたので「用意出来ているなら、まぁ良いか」と思ったのが間違いでした。

朝食の用意が出来ていると思って家に入ったのですが、朝食の用意をしている最中でした。カルナラトネは慣れた様子で「いつもこうなんだ、ここの家のカレーは美味しいよ」なんて言って椅子に座って新聞を読み始めています。チャミンドラは「母が、初めて我家を訪ねてきた外国人に我家のカレーを食べさせたいと作り始めたので仕方が無い」と言って近所のパン屋に焼きたてのパンを買いに行ってしまいました。

朝の6時からカレーかと思ったのですが、スリランカでは一日三食ともにカレーが基本です。スリランカの家庭ではカレーを作り置きをするという習慣はありません。三食共にその都度カレーを調理するので食事の用意が整うまで時間がかかります。

僕はチャミンドラのお父さんと一緒に、シンハラ語なので何を話しているのは判らないお坊さんの説法をテレビで観ながら時間を潰していました。スリランカのテレビ番組は毎日の最初の放送はお経や説法で始めるチャンネルが多いです。

漸く美味しいカレーと焼きたてのパンを御馳走になって、予定より1時間遅れて出発する事が出来ました。

（続く）

【'わんりぃ'の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わんりぃ’は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

＊紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

‘わんりぃ’　おたより会員の皆様、そして入会をご希望される皆様へ

毎年４月から新年度になります。おたより会費の納入をよろしくお願いします。

年会費：1500円　入会金なし　郵便局振替口座：0180-5-134011　’わんりぃ’

’わんりぃ’の名は、’万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

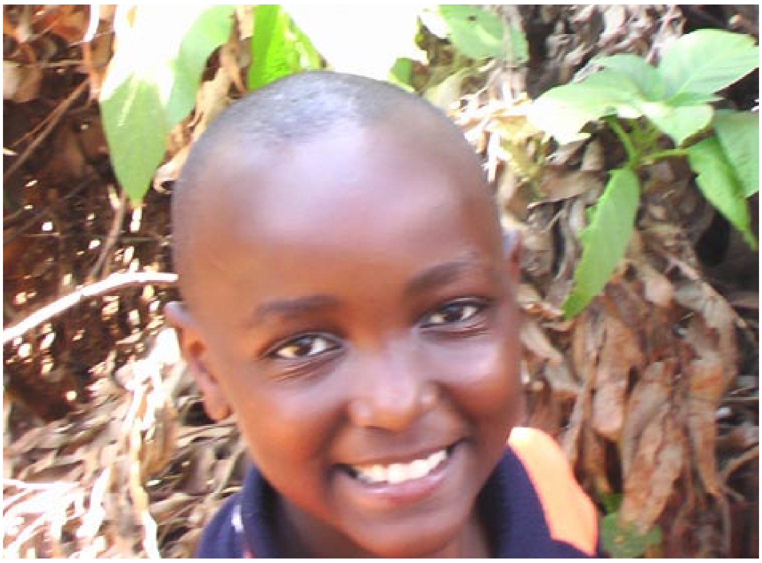
主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、２月と８月を除いて年10回、会報’わんりぃ’を発行し、情報の交換に努めています。

入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は’わんりぃ’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100（事務局）

耀く子どもたち

竹田　悦子　アフリカン・コネクション代表



　ケニアでの日々は、私がお世話になっていたNGOが主催する保育園の朝のクラスに出席することが日課になっていた。NGOの敷地内にあるこの保育園は、地域の貧困層を対象としていて、他の施設に比べると保育料は随分と割安に設定され、一ヶ月300～400円くらいだった。

　ナイロビから、車で30分ほど離れた場所にあるkitengela（キテンゲラ）という町。この地域の特徴は、もともとマサイ族の土地であった所へ、ナイロビへ出稼ぎにきている地方出身者が進出してきているということである。53民族が住んでいるというケニアの、多くの民族が交じり合って暮らす現代ケニアの縮図のような所なのだ。もちろんそういう場所は、ここに限ったわけではないが、その規模といい、人口増加のスピードといいケニア国内の地方出稼ぎ者の数は抜群に多い地域だった。

　ケニアのそれぞれの民族は、それぞれにその独自の文化と言語を持っており、生活様式も違う。それらを、ここではすべて見ることが出来る。外国人の私にとって、ケニア人の多様性、ひいてはアフリカの多様性を知るきっかけになった。

　そんな地域の保育園。牛を追う遊牧民族として知られるマサイ族、農耕民族でありケニア最大民族でもあるキクユ族、ビクトリア湖を囲む西ケニア出身のルオ族、ルヒヤ族、中央ケニア出身のメルー族、ダンスが得意なカンバ族など、有名な民族だけでもきりがない。それらの民族の子供たちがひしめきあう保育園。当初見分けは、つかなかった。みんな同じように見える。しかし時間がたってくると、名前や住所で少しずつ「違い」が見えてくるようになった。

　名前の付け方は特に各民族とても面白く特徴がある。

　祖父母の名前を世襲するキクユ族。生まれた時間で名前を付けるルオ族。マサイ族の名前は、特に発音が面白くとてもユニーク。

　それぞれの民族の住み方も違っている。マサイ族は今でも多くが牛糞を固めて作るマニアッタと呼ばれる家に住んでいて、牛を何百と飼っている。キクユ族は、近代的な家を好む人が多く、お金がある人はコンクリートを固めて西洋的な家に住んでいる。しかし、貧困層が多い地域。どの民族も、民族の伝統的な家屋ではなくて、一番安い材料でつくった「マバティハウス」と呼ばれる簡易な家に住んでいる人が多い。

　私が働いていた当時の保育園では、先生が1人いて20～30名の子供たちを教えていた。年齢はさまざまで、3～5歳くらいまでの子供たちが一緒に学んでいた。朝登校し、お祈りをする。算数・英語・スワヒリ語など教えた後、朝ごはんが出る。「ウジ」という白とうもろこしをお湯で溶いたもの。その後は、庭で遊んだりしてまた勉強に戻る。お昼までには終わり、下校する。かばんや鉛筆を持っている子は少なく、紙袋にノートを入れて、それを大事そうに抱えていた子もいた。鉛筆や消しゴムは、クラスのみんなで使い回ししていた。

　一番長い鉛筆を誰が使うかでいつも競争。それが終わると一番大きな消しゴムを誰が使うかで競争。朝ごはんのウジは、誰が一番早く飲み終わっておかわりをするかで盛り上がる。勉強の時間では、先生に当ててもらいたいとみんな小さな手を必死に上げてアピールする。ノー

トに描いた英文を添削してもらうのも、いち早く書いて一番に先生に採点してもらおうと必死。ノートの最後のページが終わると、外に出て砂に書いて覚えようとする子供たち。計算も英単語も砂に書いた。天気が良くない日は、手のひらに書いて覚える。

私は、そんな子供たちの姿を、共に過ごし教えながら、来る日も来る日も眺めていた。子供たちは、毎日「学ぶことが最上の喜び」であることを全身で伝えてくれた。

大人から見ると、貧困地域の貧困層を対象にした保育園。学ぶ環境としても完璧とはいえない。しかし、子供の目線でみると決してそうではないようだった。先生が居て、新しいことを教えてくれる場所。将来へと続く階段なのだ。

着る物もままならず、御飯もきちんと食べていない子も多かった。文房具も十分にない。自分のための本も持ったこともない。しかし、きらきらと輝く子供たちがとてもまぶしかった。「生命の輝き」としか私には表現できない。

現在、私は先進国といわれる日本にいて、あの「きらきらした感じ」がどうしても恋しくて、今はもうきっと成長して大きくなった子供たちの写真を眺めてしまうのである。

《'わんりぃ'掲示板》

大石一馬写真展『ヒマラヤ・極限に自分を求めて』 無料

1983年より10年間、ネパールに通いつめ「ヒマラヤ」を撮影し続け、
冬季の剣岳で滑落事故死した写真家・大石一馬の作品50展余り
荘厳に頂を赤く染める秀麗なヒマラヤの写真など50余点（新プリントを含む）を展示

2009年3月11日（水曜日）～5月6日（水曜日）

◎但し、火曜日は休館日です。
9時30分～16時30分（入館は16時まで）

於：町田市フォトサロン
町田市野津田町3272（薬師池公園内）

バス：
「小田急町田駅（POPビル先）」21番「鶴川駅行き」又は「野津田車庫行き」で「薬師池」下車
車：薬師公園の駐車場有

主催：町田市フォトサロン
☎042-736-8281

http://www9.ocn.ne.jp/~ph.muse/

奇跡の二胡　劉鋒コンサート

2009年4月26日（日）
18：30～（開場18：00）

於：フォーラム246
（小田急線愛甲石田駅　徒歩10分）
http://www.oij.co.jp/index.html

前売　2,500円（当日3,000円）

予定曲：二泉映月、竹田の子守唄、荒城の月、茉莉花　他

高橋康広（フルート・オカリナ）　木崎二朗（ピアノ）宮崎正秀（ベース）　中屋博之（ドラム）

主催：JWS（ジャズワークショップ）、六耀社
協賛：フォーラム246
申込：JWS・予約係　0463-96-3711
六耀社　☎0463-93-1505
http://www.officeliu.com/topic/0426.pdf

姜小青～『弦之縁』フレンドリーコンサート～

2009年5月9日（土）
16：00（開場15：30）

於：大倉山記念館ホール
（東急東横線「大倉山駅」より徒歩7分）
http://o-kurayama.jp/index.html

共演者：西本梨江（ピアノ）
馬平（中国木琴・打楽器）

料金：￥4,000（前売り）　￥4,500（当日）　全席自由
主催：姜小青フレンドリーコンサート実行委員会
申込：名前、住所、電話番号、チケット枚数を明記の上、なるべくFAX、又はE-Mailにてお申し込みを。

FAX：045-313-5188
☎080-1304-7347（お問い合わせ及び電話受付）
E-Mail：xianzhiyuan_hz@ybb.ne.jp

▶和光大学◀

オープン・カレッジぱいでいあ2009
～開講のお知らせ～

和光大学の「オープン・カレッジぱいでいあ」は、高校生からシルバー世代の方まで参加できる開かれた市民講座として開催されています。

講座は一年を春期講座と秋期講座の二期に分かれ「アジアのことば」「let's try!」「美術と音楽」「文芸」「歴史と社会」「ココロとくらし」「学生とともに学ぶ」の7群（今期は75講座）でそれぞれの受講生を新規に募集しています。

●会場：和光大学ぱいでいあ教室
小田急線鶴川駅北口徒歩1分
町田市能ヶ谷町197鈴木ビル5F・6F
●受講申込み：4月13日（月）「受講申込書」必着
●講座名など詳細問合せ：
☎044-988-1433　和光大学企画広報課

【講座よりの抜粋】

◆インド芸術入門　5月7日開講
〈インドのシンボリズム〉をテーマに人々の暮らしと関わる芸術を多くの写真資料、ビデオ映像で紹介
・講師：袋井由布子
1993年よりインドに留学。2002年マドラス大学より博士号を取得
・毎木曜日　20：10～21：40　全20回　10名
・受講料：32,000円　プリントを配布

◆東アジア世界と古代日本①　5月8日開講
古代の日本を、広く、東アジア世界の中における日本列島という視点から、古代日本の豊かな歴史的姿及び異文化を受け入れる躍動の社会を見る。
・講師：李　進熙
1927年、韓国生。和光大学名誉教授。文学博士「広開土王陵碑の研究」（吉川弘文館）他多数
・毎水曜日　14：40～16：10　全16回　20名
・受講料：24,000円　プリントを配布

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついでの折に'わんりぃ'の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

【4月の定例会とおたより発送日】
★定例会：4月16日（木）13：30～　田井宅
★おたより発送日：4月28日（火）13：30～田井宅

ā lǐ shān de gūniang
阿里山的姑娘

台湾民謡

gāoshān qīng　jiàn shuǐ lán
高山青、涧水蓝。
ā lǐ shān de gūniang měi rú shuǐ ya
阿里山的姑娘美如水呀、
ā lǐ shān de shàonián zhuàng rúshān nǎ
阿里山的少年壮如山哪。
a
啊。
ā lǐ shān de gūniang měi rú shuǐ ya
阿里山的姑娘美如水呀、
ā lǐ shān de shàonián zhuàng rúshān nǎ
阿里山的少年壮如山哪。
gāoshān chángqīng jiàn shuǐ cháng lán
高山常青、涧水常蓝。
gūniang hé nà shàonián yǒngbù fēn/fèn nǎ
姑娘和那少年永不分哪、
lǜshuǐ cháng wéi zhe qīngshān zhuàn
绿水常围着青山转。

阿里山は台湾中南部に位置する台湾の国定公園。周辺には台湾最高峰の玉山（標高:3952 m）を初め、2000 m, 3000 m級の山々が連なっている。夏の平均気温は14度、冬は5度。日照時間が短く、霧が漂うことも多く、お茶の名産地としても知られている。

▶表紙写真の説明

❀紅茶畑で働くタミル人女性たち

イギリスが植民地時代に導入した紅茶栽培の担い手はほとんどがインドから連れてこられたタミル人です。写真は彼女たちが一仕事を終えて、収穫した茶葉を量るために待機しているところです。

尚、この写真は８月撮影ですが、茶摘みは８月とは限りません。日本では５月初めのころが茶摘みの季節ですが、スリランカでは茶畑が100mくらいのところから1000m以上のところまであるため、地域によって茶摘みの時期が違います。また同じところでも一番茶、二番茶などとあります。　（為我井）

◎為我井さんは、スリランカの文化及び教育支援を目的とした活動を展開しており、その活動の折に撮影した写真をもとに、写真集「カメラを通して見たスリランカ」を今年１月出版されました。久美堂本店と西友町田店7Fのリブロで販売中です。　定価：1050円（税込み）

http://www.bungeisha-va.co.jp/bookinfo/detail/978-4-7818-0103-2.jsp
問合せ：為我井　☎　042-735-9583